

安息日の主なるキリスト

サムエル記上21：1～7

マルコによる福音書2：23～28

十戒は前半が神と人との関係で、後半が人と人との関係を規定していますが、前半の第四戒にある安息日を守ることは神様に対する人間の服従、礼拝に関する大事な戒めです。

大阪におりました時にはすぐそばが有名な商店街でしたが、そこに一軒の韓国の食品を店頭販売するお店がありました。その女店主がキリスト者であって毎週のように教会の礼拝に来ておられました。飲食関係のお店にとって日曜日というのは稼ぎ時であるにもかかわらず、礼拝参加のために日曜日は休みにしていました。ご主人は日本人でありましたがキリスト者ではなかったのですが、奥様に連れられてご夫妻で教会に来ておられました。

ドイツではもう百年以上前から、お店の営業時間についての規則がありまして、基本的に安息の日である日曜日は交通機関や救急病院などの他は休業とすることになっています。30年くらい前は土曜の午後から翌日の終わりまでスーパーなども閉まっていたので、土曜の午前中までに翌日の分を買っておかないとひどいことになってしまうことでした。日本で暮らしている者にとっては不便かもしれませんが、ドイツもその後規制が緩和して大分開店時間が長くなってきました。この規制緩和については当然教会は強く反対しました。また宗教的な意味で安息日を守るというだけではなくこの世的にも、労働者の勤務時間を守るということや、大型スーパーに対して小売店を守るということで、そのような側からも反発があったことは確かです。つまり安息日を守るということが本来礼拝のためにこのような規制があったにもかかわらず、その他のいろいろな立場から安息日を守るということについての支持があるのです。また皮肉なことに、日曜日が休まなければならないとしてドイツ人が日曜の午前は皆礼拝に行くかということそんなことはありません。都市に住む彼らの多くは、以前日本でも流行りましたが、郊外に小さな菜園とか小屋を持っています。そこで一日自然を満喫し、友人たちとバーベキューやパーティーなどしたりして過ごすのでした。この観点からすると本当に安息日の規制はどのくらい実質的に意味があるのかと問いたくもなります。

ところで私たちキリスト者は日曜日を安息日としていますが、これは主の復活を覚えて主に礼拝をささげるところから来ています。しかしそもそもユダヤ教では土曜日が安息日なのです。神様が六日で世界を創造し、次の日に休まれたということです。安息日のことをシャバットと言いますがこれは休むとかやめるという言葉から来ています。ドイツ語でもフランス語でも土曜日はこの安息日（シャバット）に由来する言葉です。因みにラテン系の言葉では日曜日が主の日という意味から来ているものが多いです。

このように安息日には日ごろの活動を止めるという規定ですが、イエス様の弟子たちは道端で麦の穂を摘んでいました。それを見つけたファリサイ派の人たちは直ぐにそれをとがめてイエス様に問い詰めるのです。なぜ安息日にこのようなことをするのかと。言ってみればイエス様の弟子たちは、わきの甘いものが多かったのです。ファリサイ派の人たちは、日ごろからイエス様たちの活動を見張り落ち度がないかを目を皿のようにしていたのです。ですから弟子たちの行動についてもすぐにつけ込んだのです。政治においても、政党が反対勢力のリーダーや黨員たちを失脚させようとして、些細なことにもつけ込もうとするのはよく見られます。しかしこれは何もこの世の政治団体だけでなく、組織があればおおよそ見られることで、宗教団体においても例外ではありません。このような器量の狭さというのはどこにおいても見られることでしょう。

ファリサイ派の人たちのつけ込みに、イエス様はかつてダビデが逃亡中に、本来なら祭司しか食べられないものを食べたということを持ち出して返答しますが、これはやはり緊急事態には規則遵守よりも人が助けられなければならないということでしょう。かつて、安息日についても一日で歩ける距離は何歩と決まっており、日ごろの活動ができないように規定されていますが、それを遵守しなければならないとなると大変なことにもなりかねなくなってきたことがあります。それは戦争です。旧約聖書続編にはマカバイ記というのがありますが、そこにユダヤに対して異邦の民が、ユダヤの安息日を狙って攻め込んだことがあります。戦争にはずるいも卑怯もない

と言ってしまうばそれまでですが、これは当然あることかもしれません。ユダヤの民は安息日を遵守したため大変悲惨な結果となって強います。そこでその後、首脳部が集まって、安息日の規定をもう少し柔軟に考えなければ自分たちは滅んでしまうということを協議するのです。私の記憶でも大分前のことだったと思いますが、中東の戦争で、相手の安息日を敵が攻撃して来て悲惨なことがあったとの報道を覚えています。はっきり覚えていませんが、イスラエルの安息日は土曜日ですが、イスラムの安息日は金曜日なので、もしかしたら報復をしあったことがあったのかもしれませんが。

本来、律法というのは人を殺すものではなく、生かすもの、助けるものでしょう。安息日の規定も、人を助け神様との正しい関係と保たせるものなのです。ところが人を生かす律法が、安息日の規定が、人を助けるというよりもそれが重荷になってしまうというのは本来的ではありません。この律法というのはいわば頸木のようなもので、真っ直ぐに正しい道を歩んでいけば、その頸木は何ともないのですが、自分勝手に歩もうとして道を外して歩もうとすると、頸木は痛く締め付け重くなるのです。また良い意味では階段の手すりの様だともいえます。人が階段を上り下りする場合に、健康で丈夫ならば手すりは要りませんが、足腰の弱い者は手すりが必要となり上り下りを助けてくれるでしょう。

安息日を守るということが、神様に礼拝をおささげするためにあるという本来の意味が薄らいでいき、形式的に遵守するという目に見える行動規制ばかりに捕らわれていくというのは、かつてのファリサイ派だけではありません。先程述べましたように現代ドイツ社会においても、安息日規定というのが様々なこの世的思いによって考え決められているのを見ると、そこに人間の弱さや罪を垣間見ることができるのではないのでしょうか。確かに規制がなければ人は誤った方向にいき易いということはあります。もともと自己本位で自分の好きなように神を忘れて生きて行こうとしてしまうのが人間です。律法を守っているようでも、知らず知らずに自分の心がその律法の本来意味するところから乖離していつてしまうのです。心は遠く乖離していつてしまっているにもかかわらず、見える行いとしてはきちんと遵守しているとしてふるまう、そしてその自分の心の状態に気がつかずに自己義認し、正当化して更に他人を裁いてしまいがちなのです。

神様の言葉、戒めを心に留めるということ、それは神の言葉の真髄、律法の精神を深く知り、絶えず自己吟味するというに他なりません。

安息日をわたしどもに与えてくださった主は、独り子イエス・キリストにおいて、すべてを与えてくださった恵みの主です。その意味で、安息日の主は御子イエス・キリストであるといえるのです。イエス・キリストを通して与えられている安息日は決して重荷や不自由ではなく、正しく生きるための助けであり、恵みであり喜びなのです。

人生において中断というのは必要です。日常の活動や思いが断たれたところに、神様の思いが介入してくるのです。中断した心の働きにおいて、神の言葉が降り注ぐ、そのような時が礼拝における安息の時です。週のはじめの主の日の礼拝において、安息を味わい、その恵みの憩いで一週を歩みましょう。